

皆様こんにちは。はじめまして。いまご紹介に預かりました、三好賢子と申します。

私が香川県に参りましたのは20年以上前なんですけれども、高松市にあります県の歴史博物館で彫刻史の担当として採用されまして、以来、博物館の仕事として善通寺様の文化材の調査や研究というものに携わってきました。

今日は「てくてくワークショップ」ということで、善通寺のいろんな文化財について、いままでのワークショップでもいろいろな先生方がお話しされてきたと思いますけれども、今日は、私のほうからは善通寺の御本尊・薬師如来像のことをお話し申し上げたいと思います。

タイトルを「善通寺の本尊薬師如来と運長」としてありますけれども、この「運長」って、皆さんご存知でしたか。知らないですよ。運長というのは人の名前で、お薬師さんを造った「仏師」さんです。現代的に言うと、仏像彫刻の作家さんです。今日は、お薬師さんがつくられた経緯や関連のお話を中心に、講演させて頂きたいと思っています。（お手元に、1～9までのページ番号が振られている資料のプリントがあると思うんです。何か抜けている、まだお取りになっていない資料がございましたら、後ろのほうにスタッフの方がいらっしゃるので、是非お声掛け頂けたらと思います。）

それでは早速なんですけど、お配りしたプリントを見て頂くと、文字ばかりで「え、これ何だろう」みたいにおもいませんか。それで、今日はせっかくなので、最後に皆さんで伽藍のほうへ伺って、御本尊さんを実際に拝観したいと思っています。ですから、この会場でのお話、プリントを見ながらのお話はなるべく早く終わるように努力したいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。それではいまから、座らせて頂いてお話をさせて頂きます。

（スクリーン：薬師如来像）こちらが善通寺様の御本尊、金堂のお薬師さんなんですけれども。プリントの1ページ目をご覧いただきながら、このお像についての基本的なことをご説明申し上げます。

「法量」と書いてあるのは、これはサイズという意味なんですけれども、一丈六尺なんです。一丈六尺」というのはぜひ覚えておいて頂きたいんですけれども、仏様を彫刻で造ったとき、あるいは絵画で作ったときの基本となるサイズの考え方というのがございます。（スクリーン：仏像のサイズの考え方）この「一丈六尺」と言っているのは、一尺を30.3cmと考えれば485cmとなります。5m弱ぐらいあります。「一丈六尺のお像」であれば、立っていれば5m弱ぐらい、座っていれば半分を考えて八尺ですので2m40cmぐらい。これを「一丈六尺」というふうに呼んでいます。また、「一丈六尺」というのは略して「丈六（じょうろく）」と言ったりもするんです。「丈六のお像」というふうに、一と尺を略して言います。

（スクリーン：平等院 阿弥陀如来像）一丈六尺のお像で有名なものはこちら、お分かりでしょうか。宇治の平等院の阿弥陀如来像で、大仏師定朝さんという人が造ったもの。こち

らは座っているお像で一丈六尺なので、やはり八尺、2m 半ぐらいのお像になります。

続いて、配布プリントのほうには「構造技法」と書いています。そもそも善通寺の本尊薬師如来像は、材質は木で造られています。構造は「寄木造」と呼ばれるもので、これはどういうものかと言うと、この宇治の平等院の阿弥陀如来像もそうなんですけれども、木で造っていく場合、ある一定のサイズのものは一塊の木から造れますけれども、大きくなっていけば木の部材をいくつも組み合わせて、組み上げていくことになる。これを「寄木造」と言います。(スクリーン：寄木造) 平等院のお像も、構造を分解していくとこのようにいくつもの材を「接(は)ぎ合わせ」て造られているのが分かります。接合して造っているんですね。そして接ぎ合わせの場合は、このように「内側をくりぬいて」いるんです。これが、寄木造のひとつの特徴になります。

平安時代の後期ぐらいから、この寄木造というのが日本の仏像製作技術の主流になりまして、どんどんと大きなお像も造られるようになります。パーツ毎に生産することができるようになって生産性が上がり、工場の発達ということにも繋がっていきました。

「寄木造」のとなりには、「玉眼(ぎょくがん)」と書いているんですけれども、これは何か分かりますか。玉眼とは、仏様を彫刻で造るときに、その眼にいかに存在感を強く表現するか、ということで用いられる技法です。こういう技法が何故、どういうタイミングで発達していったのかはまだ分かっていないんですけれども。

(スクリーン：玉眼の図解) 図解するとこんなふうになります。正面から見ると、眼の部分のくりぬいている。要するに、顔の裏側から内刳(うちぐり)してある。そして中が空洞なので、裏側から水晶を嵌めて、瞳は墨とか漆で描いていく。白眼のところには和紙とか綿をあてて、その外側を当て紙とか押え木で蓋をして、固定する。こういうもので玉眼というのが構成されているわけなんですけれども。平安時代の、12世紀半ばぐらいから登場してきました、鎌倉時代以降は、仏様を木で造った場合にはよく使われる技法になります。

(スクリーン：恵光童子像) こちらは、高野山金剛峯寺の八大童子のうちの恵光童子なんですけれども。ちょっとわかりにくいなんですけれども、瞳に、写真を撮った時の光が反射していると思うんです。これで玉眼が入っているというのがお分かりになると思うんですけれども。いまでは、仏像の展覧会もよくされていますけれども、どの会場へ行っても混んでいて、なかなか懐中電灯を当てて見るということは出来ないと思うんです。私が学生的时候には、懐中電灯を持って行って実際にケースの中の仏像を光らせて、鑑賞することがまだ出来ていたんですね。そのときに、玉眼の瞳のものはピカッと光ることがありました。

今日は、「善通寺のお薬師さんがどうやってつくられていったか」「運長さんがそれにどう関わっていったのか」ということをお話ししていくわけなんですけれども。そもそも仏像

をつくるとき、造立するときにはどういう順序で物事が進んでいくのかということ、最初にお話ししたいと思います。

まずは、願を立てる人がいます。これは仏像をつくろうとする人で、発願者といいます。そして、たった一人で願を立てたとしてもですね、それに賛同する人たち、つまり結縁の人たちや施主とよばれる人たちが協力者としています。そのあとに、発願をした人たちから頼まれる人、実際にお像を製作する仏師がいます。お薬師さんで言えば、これが運長さんになるわけですね。そして仏様というのは、造っただけ、物理的に完成しただけでは終わりではなく、必ず最後に「開眼供養」というものを行います。瞳を入れる儀式ですね。これを行うことで、仏様に魂が入る。それでようやく仏として存在する、完成するということになります。

日本の歴史上、この開眼供養で一番盛大なものというのが、皆さんもよくご存知の東大寺大仏殿の大仏「盧舎那仏（るしゃなぶつ）」のものなんですけれども。このときの開眼供養が日本の歴史のなかで一番華やかで派手だった、というふうに言われています。（スクリーン：盧舎那仏の開眼供養の再現）東大寺の盧舎那仏は天平勝宝4年、西暦で言いますと752年に開眼供養が行われたんですけれども、この写真は、昭和55年ぐらいに、当時の盛大な模様を再現したときのものになります。これくらい華やかなものだった、というのをいま写真でご覧頂いているんですけれども。

開眼供養のとき、天皇は孝謙天皇という女性の天皇でしたけれども、本当は、この盧舎那仏というのは聖武天皇（当時）が願を発してつくることになったお像です。（スクリーン：開眼供養に使われた筆）それで、これが実際に開眼供養のときに使われた筆です。筆のとなり写っている青い長い紐は、これは実は200mぐらいある長い紐なんですけれども、これを筆のお尻のところに結びつけて、聖武太上天皇をはじめ、天皇、それからいろんな貴族たちがお像の下の方に居て、筆からつづくこの紐を皆で握って開眼供養の儀式をした、というものになります。この筆と紐はいまも残っています。写真で見るとすごく小さいですけれども、この筆、長さは65cmぐらいあるすごく大きなものです。これが何故いまも残っているかというと、聖武天皇が亡くなったあと、光明皇后がゆかりのものを東大寺に寄進して、それがいまも正倉院の蔵の中に眠っているということです。

（スクリーン：善通寺金堂）今日は善通寺本尊の薬師如来像のお話なんですけれども、こちらはそのお薬師さんが安置されている金堂になりますね。棟上げされたのが、元禄12年と分かっていて、こちらは建造物の文化財として平成24年に重要文化財に指定されているものです。

運長さんは、姓が北川といいまして、北川運長さんと呼ばれますけれども。この人は京都

の松原通柳馬場東入ル町に居住していた、ということが分かっています。(スクリーン：京都の地図) これ、地図ですけれども分かりますか。全然分かんないですね。南北に青く描かれているのが鴨川ですけれども、ここに五条通があって四条通があって、その間に柳馬場通というのがあります。それから松原通というのがここにありまして、このふたつの通が交差するところのちょっと東辺りに住所があった、ということなんですけれども。いまはもちろん、「ここが住んでた所です」というのは特定できませんけれども、概ねこの辺りに住んでいた京都の仏師、ということになります。

運長さんという方は、「御室大仏師」と言われたり「仁和寺木工仏師」と言われていて、仁和寺、御室派の仏像製作にいろいろ関わっていたと考えられています。

(スクリーン：千手観音像) 御室派の仏像として有名なものが、大阪の藤井寺にある国宝ですけれども、こちらの千手観音というお像です。これは木で造られている仏様ではなくて、漆で造られている脱活乾漆というものです。古いもので、奈良時代に造られたものですが、北川運長さんはですね、このお像を修理をしたというふうに言われています。どの部分を修理したかと言うと、これは千手観音さんなので頭のところに顔が11面載っているんですけれども、この内のいくつかを修理した、新しく造り替えたと言われています。それでいま、この頭の上の小さいお顔を写真でご覧頂いていますけれども、この前向いて横を向いているお像、こちらがおそらく運長さんではないかと考えられるものです。

(スクリーン：大元帥明王像) ほかにいくつか、運長さんが造ったものが残っているんですけれども、こちらはそのひとつになります。これは大元帥明王というもので、大阪の市立美術館に収蔵されているものですけれども、「造りかけ」なんですね。これは松の木で造っていて、大きさがたぶん一尺ぐらい、30cm ぐらいのものですけれども。側面に、途中で終わってしまった経緯が書いてあるんです。今日はちょっと時間の関係で詳しくはお話ししませんけれども、まあ、こういうものが残っています。

それから、もちろんこちらの善通寺さん、お薬師さんは北川運長さんの作なんですけれども、実はほかにもあるんですね。(スクリーン：十王像) こちらです。護摩堂と親鸞堂のあいだに回廊があって(閻魔堂)、その段に十王像が置かれていると思うんですけれども、こちらも運長さんの作になります。そしてこれは閻魔大王の座っている座をひっくり返したところの写真なんですけれども、ここに「宝永二年」と書いてあるんですね。さらに「三月吉日」「現住僧 光胤」、そして「大仏師 運長」と書いてあります。なので、運長さんがこちらのお薬師さんを造ってしばらくしてからの作、ということになります。こんなふうに、台座の裏に書いてあるわけですね。

(スクリーン：大日如来坐像) それから香川県内ですと、三豊市仁尾の円明院さんの大日如来坐像、こちらも運長さんの製作と言われているものです。

運長さんの活動で必ず出てくるのが、真言宗の高僧で「浄厳覚彦(じょうごんかくげん)」

という人。この人とともに行動をしているということが知られてきています。浄厳さんというのは大阪河内国に生まれて、延宝6年、西暦で言いますと1678年に善通寺にいらっしやっています。その後、ちょうど善通寺に来ていたところ、当時の初代高松藩主・松平頼重に招かれて「ちょっと高松にも寄ってよ」と言われて、高松で頼重公にもいろいろと教えを説いたと言われています。

配布プリント1ページ目の下のところに、『浄厳和尚行状記』というものを載せていますけれども、これを読みたいと思います。「京御室ノ門前ニ北川運長法橋（ほっきょう）ト云仏工アリ 二十三歳ノ春ヨリ和尚ニ知遇メ指南ヲ蒙リ多ク仏像ヲ作り」というふうに書いてあります。それからその下ですけれども、「和尚常ニ仏菩薩ノ形像ヲ作り或ハ図画スルニ儀軌本経ヲ勘テ印相（＝手の形）表ノ色（＝仏の色）持物（＝持っている物）等ヲ正シクシ 仏工画師ニモ潔斎セシメ」と書いてあるんです。要するに、浄厳さんがいろんな經典とか決まりごとに基づいてしっかりとしたものを、規則に則ったものを仏師や画師につくらせていた。そして、最後に「潔斎セシメ」と書いてあるんですね。これは仏師や画師にも正しい決まりのなかで、清浄を保たせて、そして製作にあたらせていたということが読み取れるわけです。

配布プリント2ページ目をちょっと開けて頂きたいんですけれども。そこにひとつエピソードを、縦書きの文章で掲載しています。これは浄厳さんの弟子の蓮体（れんたい）という人が書いた『観音冥応集』という文書なんですけれども、浄厳さんにまつわる伝記のようなもの、エピソードを書き留めたものです。ちょっと面白いのでご紹介します。

内容としましては、京都丹波の穴穂寺のことが書かれているんですけれども。とある関東に住んでいる人が北川運長さんに仏像「不動ノ三尊」を造ってもらったと。それが非常に小さいもので「長五寸ニ作ラシメレバ」とあります。そして、開眼供養をお願いしたのはこの浄厳さんであった、と書いてあります。仏像を造ってもらった人は金3両のお金を払ったけれども、小さな不動三尊だったので、信心しないというわけじゃなかったけれどもふと「ちょっと高いんじゃないかな」と心によぎった。そうしたら、不動の脇侍の制陀迦童子が、顔が赤いほうの童子ですね、それが怒って「靈験がないとはなんだ、高いとはなんだ」と言って取り憑いてその人を殺してしまった、という話なんです。だから、仏像が高くてそういうことは考えたらイカン、という話なんですけれども。

さらにですね、この中には、仏師がどうやって仏像を造っているかということも書いてあります。最後から4行目ですけれども、「仏師モ膠（にかわ）ヲ用ズ丁寧ニ作り、開眼ノ阿闍梨モ高德ナレバ、末世ナリトイエドモ、不思議ノ靈験アリト、羞（はじ）懼レ（おそれ）ケリ。」とありまして、「サレバ仏ヲ造ルニハ価ヲ典ズ（＝値切らず）、清浄ニスベキ事ナリ。」「故和尚、運長ヲシテ仏像ヲ作ラシメ玉フ時ハ、必ズ潔斎セシメ、」と。やっぱり出てきましたね、潔斎せしめる。それから「酒肉五辛ヲ禁ジ、」酒と肉、それから五辛というのは5

つの辛いもの、香りの強いもののでニンニクとかネギとかですね、そういったものを断たせる、禁じると。さらに「房事ヲ断チ、」房事というのは女性との営み事ですね。そして「膠ヲ用ヒシメズ。故ニ尊像ニモ靈応アルモノカ。」と。要するに浄厳さんという人は、このように仏師にも厳しい規律を求めて造らせていたんです。ここで覚えておいて頂きたいのは、江戸時代になると仏像を造るにあたって膠なんてものはよく使うんです。けれども、浄厳さんは運長さんが仏像を造るときには膠を使わせなかった。何故かという、膠は動物性のもので出来ているんですね、接着剤。それをあえて使わせない。要するに、植物性のもので、漆とかそういうもので仏像を造りなさいというふうに決めていた、ということが読み取れるわけです。

それではここから、本題に入っていきますけれども。

善通寺の本尊・薬師如来像は何故、北川運長さんが造ったものだと分かるのか。これは仏様のほうに作者の名前が書いてあるとか、そういうことじゃないんです。そうではなく、関係の文書類や史料がたくさんこの善通寺様に残っていて、そこから作者が分かるということです。

関係する文書は全部で 15 件残っていて、それらは大きく四種類に分けることができます。①のものは注文書。仏像の制作に関わり、どんな仏像をつくるかということを書いた、いまふうに言うと仕様書のようなものです。設計書とまでは言わないけれども、まあ、こんなふうに造りますと。それで「こんなふうに造るといくらです」と書いてある見積書でもあります。②のものは、実際に造り始めて、どのようにその金額を分け分けして払っていったかという、お金のやりとりの書類です。完了後一括払いとかじゃなくて、定期的な月賦払いみたいなことでもなくて、その都度々々、おそらく払う側のタイミングで払っているようなことが推し測れる、そのようなお金のやり取りの書類です。それから、運長さんは京都の仏師でしたけれども、どこで造ったと思いますか。やっぱり、ここでは造らないで、京都で造るんですね。京都の工房で造る。それを船に載せて、おそらく丸亀港まで運んで、あとは陸路だと思うんですけれども、そういった仏像製作とはまた別の費用、実費で発生した運搬に掛かる箱の製作の覚書とか支払いの書類が残っています(③)。そして最後、④は礼状などのお手紙です。こういった 15 件四種類の文書で、造られた経緯・経過というのが分かっているわけなんです。

(スクリーン：『御注文』) まずは①の注文書ですけれども。こちらすごく長い書類になっていまして。お手元の配布プリントには、3 ページ目と 4 ページ目に活字に直したものを載せさせて頂いています。それで、ちょっとスクリーンが遠いと分かり難いかも知れませんが、ここに「御注文」と書いてあって、「一 薬師如来…」 「一 上檜木地…」 とづらづら書いているんですね。配布プリントのほうには、「一」の上にそれぞれ「〈ア〉、〈イ〉、

〈ウ〉、…」と添えていますけれども、この『御註文』という文書は要するに、どういう仏像にするかという項目立てなんです。全部で18項目。〈ア〉と添えた項目から、〈ツ〉と添えた項目まで。造立にあたって、どういう条件で造るかということが書かれているものです。(スクリーン：『御註文』) アップにするとこんな感じ。結構達筆な、くずし字で書かれているので、頑張って読んで活字にしていますけれども、もしかすると読み切れない癖のある字もあつたりして、読み間違いもあるかも知れませんが、この注文書から大体のことが見えてくるんですね。

冒頭はこのようにはじまりますね、「一 薬師如来座像毫際八尺」。「薬師如来」の「座像」座っているお像で、「毫際八尺」と書いてあります。「毫」とは何かと言いますと、よく、仏・菩薩の眉間のところにポッチがありますね。おできのような。あれはおできじゃなくて「白毫(びやくごう)」と言うもので、伸ばすと一丈ぐらいある一本の長い毛なんです。悟りをひらく仏・菩薩の表象というか、体の特徴なんですけれども。要するに「毫際八尺」は、座しているところから白毫までの高さが八尺、という意味なんです。

今日本当に、細かくこれを見ていくことができないのは残念なんですけれども、たとえば〈イ〉というのは、これは本体をどう造るかということが書いてあります。「一 上檜…」上質のヒノキで造ると。「木地作り念入…」念入りというのは丁寧に造る、現代でも意味は通じると思いますけれども。「内わく組念入仕(つかまつる)…」で「上々水精玉眼…」ですね。先ほどお話しした玉眼ですけれども、上々の水精(=水晶)ですからすごく良い水精を使いますと書いてあるんです。あと、傍線を引いているところですが「惣軀とりおき五ツニ仕召合」と書いてあって、要するに、お像が大きいので五つに分解できるように仕上げます、ということが書いてあるんです。これはあとでまたお話ししますが、頭と、両肩からの左右の腕と、胴と、そして膝のところを五つに分けて造って、それを召し合わせるということになります。さらに読んでいくと、接合したところは見分けがつかないようにちゃんと仕上げます、ということも書いてあつたりするんですね。

あと、〈ウ〉のところは表面の仕上げについて。「一 御身上ニ金粉(きんぷん)まき立惣軀大焼祓はく…」体の上に金粉をまきたて、「大焼祓はく」というのは金箔の種類やグレードのことを言っていて、非常に良い金箔を使いますということ。しかも「三返漆置ニ仕…」三度、漆を塗って箔を置いて、また漆を塗って箔を置く、というような造り方も条件にしています。

それから〈エ〉は、「一 まき羅髪…」。(スクリーン：薬師如来像) これは顔のアップなんですけれども、「羅髪」というのは髪の毛のこと。「下地堅地塗り上々紺青漆まき」ということで、このように紺青色に着色していますね、髪の毛。これも先ほどお話ししたように、膠で着色することはあってもおかしくないんですけれども、運長は膠を使わない。ですから、漆を接着剤にして紺青の顔料を蒔いているということが分かります。

〈ア〉から〈カ〉の項目というのは軀本体、お像本体に関することが書かれていますけれども、〈キ〉から〈サ〉まではお像のうしろにある光背のことが書かれています。

〈キ〉を読んでみます。「一 船後光上檜…」、「船」というのはこの光背全体の形が船の形をしているので。ほかに「船光背」と言ったりもするんですけども、まあ、ここでは「船後光」と言われています。これも「上檜…」上質のヒノキで造って、「うず雲深く地ほり…」と書いてありますね。(スクリーン：光背の部分アップ) ここを見たら分かるんですけども雲紋ですね、雲紋がびっしりと彫られています。

そして〈ク〉のところ、「一 後光上ニ寶塔内ニ金剛界大日尊檜木地作り念入…」とありますけれども、後光の上、宝塔のなかに金剛界の大日尊を造りますと書いてある。これまでの本体とか光背は「上檜」で造ると言っていましたけれども、これはただの檜にすると書いてありますね。それから、「印相 (いんぞう) 念入作り寶塔念入作り…」と。「印相」というのは仏像の手の形です。そのお像がどういう仏様か、そのキャラクターを表すのに一番大事なのが手の形や持っている物なんです。

〈ケ〉のところには、「一 後光二十光佛木地作り…」と書いてあって、ここでは最早、上檜とか檜とか言っていたことには何も触れていない。ヒノキかどうか分からないけれども、木で造るということが書いてある。それから「一圓之内ニ光ヲ彫リ入縁リ雲ニ仕」と書いてあって、「一圓」というのはこのまるい円のことで。それぞれの化仏の光を円く彫って、周りは雲にする、というふうに書いてあります。

そして〈シ〉のところをご覧頂きたいんですけども。〈シ〉から〈チ〉までの項目は、今度は台座のこと、坐っている座のことを書いています。

〈シ〉は「一 蓮花二重切り付一重ふき候…」と書いてあるんですけども、二重の蓮花(=蓮華)をふいているように造りますと。それで、傍線を引いているところ「蓮華葉之甲に輪寶居へ紋彫り可申事」は、蓮華の葉の甲のところに輪宝の紋を彫ります、ということです。「輪寶」というのは車の車輪のような見た目ですけども、元はインドの武器で、動物とかを殺すために投げて使うものなんです。これが密教に入ってきて、悟りを開くのに邪魔なものをこれで払い退けるという意味を持ったり、あるいは仏教の教えがくるくると車輪が転がるように広がっていくことを象徴したりする、そういう法具になります。(スクリーン：台座の部分アップ) 輪寶の紋を蓮華に彫り付けますよと書いていた部分、実際にこのように彫り付けていますね。

それから〈ス〉のところですけども、「一 薄茄子…」と書いてありますが、これは本当は敷茄子というものかも知れません。蓮華座の、花びらの下のところに挟まっている部材、これを仏像用語では敷茄子と言うんですけども。「薄茄子獨股 (とっこ) 三股 (さんご) 成程念入居紋ニ可仕候事」と書いてあります。これも密教法具です。独鉈杵と三鉈杵の紋を交互に置いているんですね。あとで実際に現地へ行きますので、そのときにもご覧頂きたいと思いますけれども。こういうふうに、デザインのところまでちゃんと決めているん

ですね。

(スクリーン：連子部分アップ) これは〈夕〉に関係するところです。「一 連子牡丹地彫り惣地稲妻…」と書いてあるんですけども、連子の窓のところには牡丹の花を彫って、背景は稲妻のような紋様ですね、紗綾紋と言いますけれども、これを彫りますと書いてありまして、実際にもそのようになっている、というものになります。

さて最後のところですね、〈ツ〉のところには「一 惣高サ後光之先より台座之下迄式丈二尺五寸 横幅壹丈壹尺式寸奥行壹丈二可仕候事」とあります。これは最大の高さと、最大の幅と、最大の奥行きをこのようにして造ります、ということが書かれているわけです。「式丈二尺五寸」を cm に換算すると、6m81cm ぐらい。いままでですね、お薬師さん関連のいろいろな文書の調査とかをさせて頂きましたけれども、お像自体が大きいので、なかなか実際に寸法を測るということが実はできなかった。

(スクリーン：薬師如来座像の計測値) それで、これです。ついこの間のことなんですけれども、2月18日、こちらの善通寺様のほうで実際に機械を使っての測量をして頂きました。赤文字で表記しているのは、そのときに得られた数値になります。黒文字のところは、この『御註文』に書かれている数値を cm に換算したものですけれども。まあ、なんかぴったり合う数字ではないのがちょっと悩ましいんですけども。この注文書の最初に書いていた「毫際八尺(約2m42cm)」というのを計測で測ると、実際は2m32cm ぐらいでした。10cm ぐらいの差があるんですね。「だから何だ」って話なんですけれど、一丈六尺のお像なので、八尺のポイントがどこにあるかというのが実は結構、研究者の間では大事なことなんです。それで、どこの数値ならぴたりくるかというのを何となく探っていました。運長さんの最初のお約束ごとでは、白毫までの高さが八尺だと言っていたんですけども、実際の計測数値を見ていくと「髮際高」、髪の毛の際のところまで測った数値が割合と近いんです。実測値が2m40cm なので、2cm の誤差です。大体このぐらいが八尺、うまいところいつているかなというふうには見えています。

さて、お金の話をするのは不信心かも知れませんが、『御註文』の最後にもね、日付や差出人運長さんの名前の右側に、「代銀拾貳貫九百五拾目」と書いているので。このお話をすると「いまで言うといくらぐらいですか」って質問が必ず出る。だから、お金の話をしたらバチが当たるかも知れないですけども、一応今日はお話ししておきます。

江戸時代は銀の価値と金の価値と、ちょっと変動があるんです。だから必ずしもこれが正しい、絶対そうだというわけではなくて、この考え方に基づくと大体こういうことになります、というお話なんです。

銀1貫は1,000 匁です。1 匁は、いまの価値に換算すると大体2,400 円とされています。12 貫 950 目というのは、位を整えると、12,950 匁。これを換算しますと、こういう数字(12,950 匁×2,400 円/匁=31,080,000 円)になるんですね。ただ、いまの時代と江戸時代

と、私たちの物価の感覚とか価値基準はまったく違うのでね。それからさっき、お不動さん（不動三尊）を 3 両で造ってもらったという話がありましたけれども、五寸の小ささで「高いじゃないか」というあのお話。これを換算すると、金 1 両は銀 60 匁なのでこうなります（ $3 \times 60 \text{ 匁} \times 2,400 \text{ 円/匁} = 432,000 \text{ 円}$ ）。大体 45 万円ぐらいのもの。五寸ぐらいで。これを高いと思っちゃったから、制陀迦童子に取り憑かれて殺されちゃったっていう話でしたけれども。一応参考までに、ご紹介しておきます。

それでちょっと、お金の話をこのあともするんですけれども。今度は、どういうふうにその額が支払われていったかという話なんです。

（スクリーン：『請取申銀子之事』）写真を見て頂いていますけれども、こちらは史料 2 の『請取申銀子之事』です。配布プリント 5 ページ目に、活字に直して載せています。この史料 2 というのは、6 ページ目の表 1「薬師如来像の造立における支払い表」と関連していますので、合わせてご覧頂きたいと思います。表 1 というのは、造立のはじめから終わりまでに、どういうふうにお金が払われていったか、そのやり取りを表形式でまとめたものです。

元禄 13 年 2 月 5 日のところ、仏のお金「仏代」と書いていますけれども。「前銀」で、銀 3 貫目。これは史料 2『請取申銀子之事』にも書かれていることです。合わせて銀 3 貫目を着手金として、運長さんが受け取ったという史料なんです。「元禄十三年庚辰年 二月五日大佛氏師 法橋運長」と書いて、判子も押してあるんですね。そして、宛先は「愛宕山 宝蔵院様」というふうに書いてあります。これは京都のお寺なんですけれども、エンリユウさんという方を指していると思われます。善通寺の金堂の再建と御本尊の再造立をされた、光胤さんのあとに誕生院の住職になられる方です。それで、実際にいろんな仲介ややり取りを、いろんな方たちが担って、協力し合ってやっていったということも分かるかと思えます。

『請取申銀子之事』には、前銀として受け取ったからやっていきますね、ということが書いてあるんですけれども、真ん中ぐらいのところですね、「御身躰者三月中ニ組立懸御目（お目にか）可申候」と書いています。二月に受け取って「三月中ニ組立懸御目」だから、2 ヶ月弱で組み立てると書いてあるんですね。えらい早い。驚異的なスピードですけれども。さらに「其外台座後光不殘急ニ割立地さび惣而下地相からし来ル八月中旬迄ニ透与仕立箱ニ入相渡シ可申候…」と書いてあって、残る台座とか光背もぜんぶ 6 ヶ月後ぐらい、八月中旬までに造って全部箱に入れて渡しますよと言っている。そのぐらいのスピードで造る、造ることを約束して、この着手金を受け取って実際に造っていくこととなります。

表 1「薬師如来像の造立における支払い表」ですけれども。仏の代金総額 12 貫 950 目をど

ういうタイミングでどう払っていったかっていうことは、残っている文書の日付を追っていくと見ていくことができます。ただ、この支払いの文書だけでは、実際いつからここに運ばれていつ到着していたのか、開眼供養の日はいつだったのかというのが全く分からなかったんです。

たとえば、表1に元禄13年9月23日のものがありますけれども、これは善通寺から北川運長さんにではなく、別の仏師さんに、仏師久右衛門と加兵衛という人に支払いのやり取りが残ってたというものになります。その内訳を見ると、仏の製作に関わる経費のほかに「箱代」、それから「樽代」「金白代」というのが書かれていたんですね。樽代というのはたぶん、お酒とかそういう祝儀代的なものかなと。金白代とは、京都の仏師運長さんは物をこちら善通寺に運んできたときに、つまり納品のときにはついては来ないだろう、組み立て設置に立ちあう別の仏師がいたんじゃないか、とすると、おそらくこの二人（仏師久右衛門と加兵衛）じゃないかということが推し測れる。それで、運長さんの代わりに仏の代金を受け取って、あとからまた運長さんが「受け取りました」という文書を出しているんですけれども。つまり、「この9月23日ぐらいまでにはお像が着いていたのかな」というぐらいのことがいままでに言われていたことなんです。これについてはまたあとで、詳しくお話しします。

それで、最終的に全額12貫950目の代金が支払われたのは、元禄14年なんですけれども、（お像到着から）大分経ってからになります。

（スクリーン：八月十二日の覚）表1の最後、元禄14年8月12日に関連するこの史料ですけれども、配布プリントには載せていませんが、このような『覚』というものがあります。「一 御目録之通 白銀五枚 右確ニ受取申候 運長かえり次第 相渡シ可申候」と書いてあって、差出人の箇所には運長ではない違う人の名前があります。「大仏師 北川縫殿（ぬい）」と書いてあって、年記がなくて「八月十二日」と。これはですね、要するに白銀五枚というのはご祝儀用にお祝いで渡される、白銀の延べ棒みたいなものなんですけれども、それを五枚たしかに受け取りました、運長さんが帰り次第渡しますよと。「運長かえり次第」と言っているからには、このとき運長自身が不在で代わりにこの別の仏師が受け取ったと分かります。

ところで、いまも「北川運長」と個人の名前のように使っていますが、実は、仏師というのは世襲で、この名前をかたっていく人が何代かいるだろうというふうに言われています。北川縫殿という人は、おそらく2代目「運長」じゃないかと最近言われています。ですから、先ほど運長さんの作例とか、修理の履歴を簡単にご紹介しましたが、確認できる運長さんの事例が多いとしても、時代が降っていくほど初代の北川運長さんではなく、もしかすると2代目運長さんのものである、そういう可能性も出てくるということになります。

最後に、この 15 件の史料のうちの④のグループにあたる「書状（礼状）」です。史料 3 をご覧頂きたいと思います。

（スクリーン：『大仏師法橋運長書状』）これはですね、差出人に「大仏師 法橋運長 午二月十一日」と書いて、ここに運長さんの花押もあります。宛名には「誕生院僧正様 尊前」と書いてあります。これは読んでいくといろんなことが分かってくるんです。いろいろ書いてあって、自分は江戸に行っていて不在でしたということも分かる。お金のやり取りとは違う部分が、見えてくるんですけれども。

まずは「尊墨（そんぼく）忝拝披仕候（ことごとくはいひつかまつりそうろう）」ではじまりますけれども、これはどういうことかと言うと、頂いたお手紙に対する返礼ということが分かります。真ん中のほうには、「為御祝詞（おんしゅくしのため）白銀五枚 被相懸（あいかけられ）尊意幾久（そんいいくひさしく）」と書いてある。先ほどの白銀五枚、それを受け取ったことに対するお礼の文書、手紙でもあるということが分かります。それから、そのちょっと手前の箇所ですけれども、「金堂薬師如来之尊容彫刻 貴慮相叶候由ニ而」とある。要するに、運長に祝詞の白銀五枚を、善通寺側から贈ったということの理由としては、お薬師さんのお姿が思い通りのものが叶ったからだ。そしてそういうことだから、私もこの白銀五枚を頂きました、ということが書かれているんですね。それから、やっぱりお金の話はしたくないだけけれども、この白銀五枚というのがいくらぐらいかと言うと、一枚が大体 10 万円強なので、白銀五枚というと 50 万円ぐらいのお礼になります。

それから、「且又 御寺永代之御記録ニ御留置（おんとどめおき）可被下之旨（くださるべくのむね）御誕生之霊地之御事ニ御座候者 偏（ひとえに）願望ニ奉存候…」と書いてある。これは何が言いたいかと言うと、お寺としてはこの一連の造立を寺の記録として永代に留めますと言っている。運長さんとしては、「御誕生之霊地…」つまりお大師様（弘法大師空海）ご誕生の霊地ということ意識して取り組んだことなので、ありがたいことです、というふうに申し述べていることになります。ですからこの書状、史料 3 というのは、これだけ見ていくと何の手紙か分からなかったりするんですけれども、前後関係からすると、まずは「誕生院の光胤さんから受けた手紙の返礼である」ということ。それから「善通寺側はお薬師さんの出来栄えにすごく満足していた」ということと、「これを永代の記録にするとやっている」ということ。そして「運長さん側は、御誕生霊地の造仏であるので名誉なことだ、というふうに受け止めている」ということがこの手紙から分かります。

続いては、京都からどういうふうに梱包して、箱を作って輸送したのかということですが、これも。配布プリントの 6 ページ目です。実はこれも、箱の覚書というものが分厚い帳面で残っているんですね。見ていくと、もう元禄 13 年の 7 月下旬ぐらいから、運長さんは京都の指物屋に依頼を出しているんです。指物屋というのは、木の板を組み合わせていろんなものを作るお店、職人さんのことですが、そこに、こういう寸法のこういう箱を何個作ってくれと頼んでいるんですね。

それで、その帳面を分かりやすく纏めたものが表2「文書『箱之覚』から見た薬師如来像の輸送梱包箱」になります。「本尊御頭ノ箱」とか「同とう体（＝胴体）ノ箱」ですね、それから「同左ノ袖箱」「同右ノ袖箱」「同ひさ（＝膝）ノ箱」。先ほどの『御註文』のところには、「軀を五つに取り置く」という話がありましたけれども、要するに頭・胴体・左の袖・右の袖・ひざの5つということはこれで分かりますね。それから、台座も分割しているようです。「蓮華入箱」「しき茄子入箱」「返花（かえりばな）入箱」「かまちノ箱」すべて台座のパーツですね。また、10番から下のものを見ると、光背の部材が分けて箱に入れられたという状況が、見て取ることができます。これらの箱は全部、長さ・幅・厚みのサイズが分かっているんですけども、これをちょっと試みに、cmに換算して計算すると総容積が64 m³になります。やっぱり、結構なボリュームですよ。それぐらいのものを全部木箱に入れて、おそらく海路で丸亀港まできて、そのあと陸上を運んでここまで持ってきて、そして組み上げたということがわかります。

（スクリーン：薬師如来像）これが、左と右から見たお写真なんですけれど。分かりますか、ちょうど袖のところに、縦の分かれ目が見えると思うんです。右袖のところ。それから、この左袖のところはちょっと分かりにくいですが、ここにもスジが。あとで実際に金堂に行って、確認してみたいと思いますけれども。要するに、膝のところと袖のところ、ここでこう分かれる感じ、スジのようなものが表から見える部分もあります。

（スクリーン：薬師如来像の像内調査）そしてこれはですね、ここ、横から見たところなんですけれども、あろうことかお像を少しズラしています。これは平成25年に、いまから5年以上前ですけれども、このひざ前のところを少し、善通寺さんのご協力のもとで少しズラしてですね、お仏像の中を確認しました。（スクリーン：薬師如来像の像内）これは体の中なんですけれども、ここが頭のほうで、下から頭のほうを見上げている写真です。写っているのが背中、の内側ですね。それで、これは人間で言えば背骨ぐらいの位置だと思って頂いて構いませんが、ここに何か貼り付けてありますよね。「これはどうやら、文書を貼り付けているようですよ」という話になって、「どうしましょうか」と相談していたんですけども、このままずっと置いておくと、おそらくこれは何か簡易な接着剤で貼り付けているようなので、いずれ経年変化で落下するだろうと。そして落下するとそのまま傷んでしまう、朽ちてしまうということもあるかも知れないね、となり、「じゃあ取り出しましょうか」となって、取り出しました。それが平成26年の3月ぐらいです。しかし取り出してはみたものの、やはりこういうものは直ぐに開けたりは出来ない。それで、当時勤めておりました県立ミュージアムのほうで一度預かって、殺虫、殺菌の作業をしてから一、とはいえ、学芸員でも開けないんです。なので、修理のできる業者さんに来てもらって、開いてもらいました。

(スクリーン：開封作業) こうやって、開いているところなんですけれども。慎重に開いていくとですね、包紙の中に、3種類の文書が入っているということが分かりました。それをまたひとつひとつ、慎重に広げていって、で、どんな文書が入っていたかということなんですけれども。配布プリントの7ページ目になります。

結果的に、開けてみると4つのものが入っていました。それぞれア、イ、ウ、エと記号を振っておきましたが。史料アがですね、『入佛開眼供養願文』というものです。それで先ほど、「運長さんと善通寺さんの支払いの書類とか、そういうものを見るだけでは、お金のやり取りや支払い日は分かって、いつ、どのタイミングで京都から運ばれて、そして開眼されたのが分からなかった」という話をしましたけれども、この文書『入佛開眼供養願文』が出てきたことによって、明らかになったんです。もうストレートに、「入佛開眼供養願文」と書いてあるので。開眼供養のための願文が入っていた、ということですね。

(スクリーン：4つの像内納入文書) この史料アですけれども、非常に長いんですね。横が1m半ぐらいある長い文書なんですけれども、これがこうやって折り畳んで入っていたんです。そしてそれに巻き込むようにして、史料イの『御佛体之施主』が入っていました。要するに、史料アの中に史料イを巻き込んで、くるくるくるとひとつの巻物にして入っていたと。そしてその下に添えるように、史料ウの『願文』と史料エの『重誓願之由致』が個別に入っていたんです。

(スクリーン：『入佛開眼供養願文』) まずは史料アの『入佛開眼供養願文』なんですけれども、このように綺麗な楷書で書いてある。「敬白 奉彫刻 薬師如来一躰 丈六之尊像」と始まって、ずらずらと書いているんですけれども、最後のところに期日が書いてあったんですね。開眼供養の日付です。「元禄十三庚辰年九月廿一日 権僧正光胤敬白 行年 五十」と書いてある。まずこれで、開眼供養の日付が分かったということ、これは非常に大事なことなんですけど、「廿一日」というのもやっぱり意味のある日付で、皆さんもうお分かりだと思うんですけど、お大師さんが入定された3月21日の「21日」ということで、日付を重ねているということが分かりました。それから、誕生院の住職・光胤さんが、このとき50歳だったということが分かります。光胤さんのことはこれまでに、亡くなった年は分かっていたんです。享保7年、西暦1722年に亡くなったということは分かっていたんですけれども、このとき50歳ということで、逆算すればお生まれになった年が分かるということにもなりました。

漢文でずっと書いてあるので読み難かったりはするんですけれども、ここに出てくる大事な情報としては、いろんな人の名前が出てくるということもあります。征夷大將軍の武運長久を合わせて願っていたり、桂昌院、これは將軍綱吉の生母ですけれども、彼女の御息災延命とかも願われている。それから、京極家の京極縫殿。その母・松壽院も。そういった諸氏の延命とか、安泰安楽というものを合わせて願って書いている、ということがあり

ます。そして日付期日の、最後の署名のあたりに書かれている名前は、住職・光胤さんの実家の人たちです。小川坊城家の出身なので、このように坊城家の親類、お父さん、そして兄弟の長寿、安楽を合わせて願っていると、そういう願文になっています。

この長い願文に挟み込まれていた『御佛体之施主』というものの中には、施主の人たちのことを書いています。施主の人たちの長寿とか、二世安楽とかですね、そういったものを願っている。これは配布プリント8ページ目の史料イに、活字を載せています。

そしてもうひとつ、小さく折り畳んで入っていた『願文』という史料ウがあります。先の2つの長大な願文には、住職の光胤さんは自分自身についての願文というのを書いていないんですね。この『願文』というのとは当時、光胤さんのお弟子・圭胤さんという人の署名で書かれているんですけども、光胤さんを中心とする割合とプライベートな人たちの息災とか延命とか、現世来世の安楽、そういったものを願う願文が書かれていました。

そして最後に添えられていた、4通目の史料エ『重誓願之由致』というものなんですが、これは元禄13年の先の3つの願文とはまったく別のものでした。これはどういうものかと言うと、「天保十一龍集庚子十二月十七日夜戌剋…」と書いてあって、それから「五重大塔炎上…」したと書いてある。天保11年は、西暦1840年になります。これは皆さんご存知だと思うんですけども、天保11年に善通寺の五重塔は炎上しています。いまの、金堂と同じく平成24年に重要文化財に指定された五重塔は、このあと復興されて、漸く明治35年に完成した五重塔になります。その、復興に至らねばならなかった、そもそもの焼失ということが、この文書に書かれているんですね。

五重塔と金堂は、非常に近い関係にあります。要するにこれに書かれてあることは、五重塔が「十二月」に火災に遭ったとき、お薬師さんを動かしたと。燃えてしまうと危ないからと。そのときお薬師さんの体の中に、造立（開眼供養）当時の光胤さんの願文が入っていたのを見つけましたと。なので、いま、それをもう一度戻します、という経緯が書かれているんです。そして「天保十一年十二月廿八日 山主巖暁」と書いてありますけれども、この人が、当時の住職さんなんですね。この方がもう一回お薬師さんを元に戻し、合わせて光胤さんの願文も戻して、そこに自分の願文を添えた。以後、光胤さんの願力の下でずっと守られますようにという願いを込めた、お手紙というか書類ということになります。いまは、これらの納入文書はきちんと出しまして、大事な史料ですので、また善通寺さんの中できちんと保管して頂いているというものになります。

ちょっと駆け足になってしまったんですけども、会場でお話しすることはここまでにして、一旦休憩を入れてまた下で集まって頂いて、ご一緒に金堂のほうに参りたいと思います。では一旦、終わらせて頂きます。ありがとうございました。